

豊明希望チャペル礼拝

2025/7/6

「主の御名により大胆に語った」

使徒 9 : 19～31



先日、久しぶりに、フィリピンで宣教師をしておられた島先克臣先生と、フェイスブックで、ご挨拶しました。今は、滋賀県の大津にお住まいで、宿泊施設の管理をされていると言うことで、少しお話ししました。

25 年前に、フィリピンの神学校で旧約聖書を教えるための宣教師として、今、JECA の宣教団体(SLOT)のひとつセンド宣教団の日本にあるセンディングボードとして、日本の教会の協力によって派遣することになって、そのお手伝いをさせていただいたことがあります。(←2000 年に浦和福音自由教会で行われた派遣式)

派遣のお手伝いをさせていただいたとき、一人の宣教師を送り出すと言うことは、こういう事なのだと言うことの苦勞と恵みの一端を味わわせていただきました。

一人の宣教師を送り出すには、生活費以外にも、日本とフィリピンの交通費や、現地の生活の安全の調査と配慮、思ってもみなかった一つは、4 年に一度、日本に帰国したおりに、様々な教会に報告にいくために、受け入れ教会の確保、また、日本滞在中の宿泊場所と、また、お子様達の事、さらには、引退後のことなど、実に多くの考えるべきこと、また、とりわけ、先生たちを遣わすために、実に多くの教会や、クリスチャンからの献金が必要であること、また、支えが必要である事を実感させられました。



先生は、2000 年の派遣式でこのように挨拶をされました。

「今回、つくづく自分は、多くの人の祈りに支えられて押し出されているのを感じている。」とおっしゃられ、しかし「フィリピンを離れての学びの期間も、将来どうなるか不安だらけなのに、献金や祈りをもって支えてくださり、今回も、例えば多くの教会に理事の方々が頭を下げて招いてくださるようお願いして下さった。」と感謝のことばを述べられ、また、「もしそうした励ましがなければもう自分は行けないし、行かないと決断しなければならないとギリギリ

まで考えていた。」とおっしゃられました。そして、今の気持ちは、「だから、祈って支えていくくださる皆さんと別れるのがつらいというのが本音だ。」「今回、みなさんの励ましに、夫婦で涙を流して感謝したのです。」と挨拶されました。

今、使徒の働きから教えられています。今日の箇所は、教会にとっての迫害者であったパウロを教会が受け入れ、彼の身の回りの世話をしながら、危険から守り、異邦人の伝道に遣わしていく、そういう場面であります。

まさに宣教師を遣わしていく教会の働きをみると言うことであります。

さて、最初の聖句をまずお読みします。

「9:19 食事をして元気になった。サウロは数日の間、ダマスコの弟子たちとともにいて、9:20 ただちに諸会堂で、「この方こそ神の子です」とイエスのことを宣べ伝え始めた。9:21 これを聞いた人々はみな驚いて言った。「この人はエルサレムで、この名を呼ぶ人たちを滅ぼした者ではないか。ここへやって来たのも、彼らを縛って、祭司長たちのところへ引いて行くためではなかったか。」9:22 しかし、サウロはますます力を増し、イエスがキリストであることを証明して、ダマスコに住むユダヤ人たちをうろたえさせた。」

エルサレムから、遣わされて、ダマスコで増えているクリスチャンを撲滅(ぼくめつ)するために、つかまえてエルサレムに連れ帰り、あるいは、殺すために遣わされたパウロでしたが、パウロの前に現れたイエス様との出会いによって、むしろ、パウロが神さまによって、目が見えなくなった彼は、引かれてダマスコに連れていかれたのです。そこに遣わされた、アナニヤというクリスチャン(弟子:当時、クリスチャンは弟子とよばれていた・・)によって、食事を与えられ、祈って貰って目が見えるようにしてもらいました。(9:12)

で、今日の書き出しは、「**食事をして元気になった。サウロは数日の間、ダマスコの弟子たちとともにい**」たというわけです。

宮村武夫先生は、この小さな報告の箇所を、こう説明します。「この「**ダマスコの弟子達と共にいた**」この一言は、自分が神に選ばれたという気負いではなく、他の兄弟姉妹達と共にいること、一教会員、多くの召された人たちの、自分が、その一人に過ぎないという認識、宣教師パウロにとってのこの経験が是非必要だった」のだと言います。

先の、島先先生のことですが、この宮村先生がSEND・センディングボードの委員長であられましたが、いつも強調しておられたことに、この「**他の兄弟姉妹達と共にいること、一教会員、多くの召された人たちの、自分が、その一人に過ぎないという認識**」と言われたことを印象深く覚えております。

もうすこし言えば、良い宣教師は、宣教師である前に、良い教会の信徒、教会員でなければならない。教会に良く仕える人でなければ、良い宣教師にはなれないと強調しておられました。

ここのパウロの場合、パウロは何よりも、ダマスコの教会の人たちをつかめる役割があったわけですから、そんな彼が、ダマスコの教会の人たちに受け入れられ、さらには、このパウロならばと、信用されて、まさに、宣教師としての身の回りの

世話を受け、多くの献金が支えられて、送り出される必要があったわけです。

教会には最初、うたがいがあった、信用はなかったことが正直に報告されます。

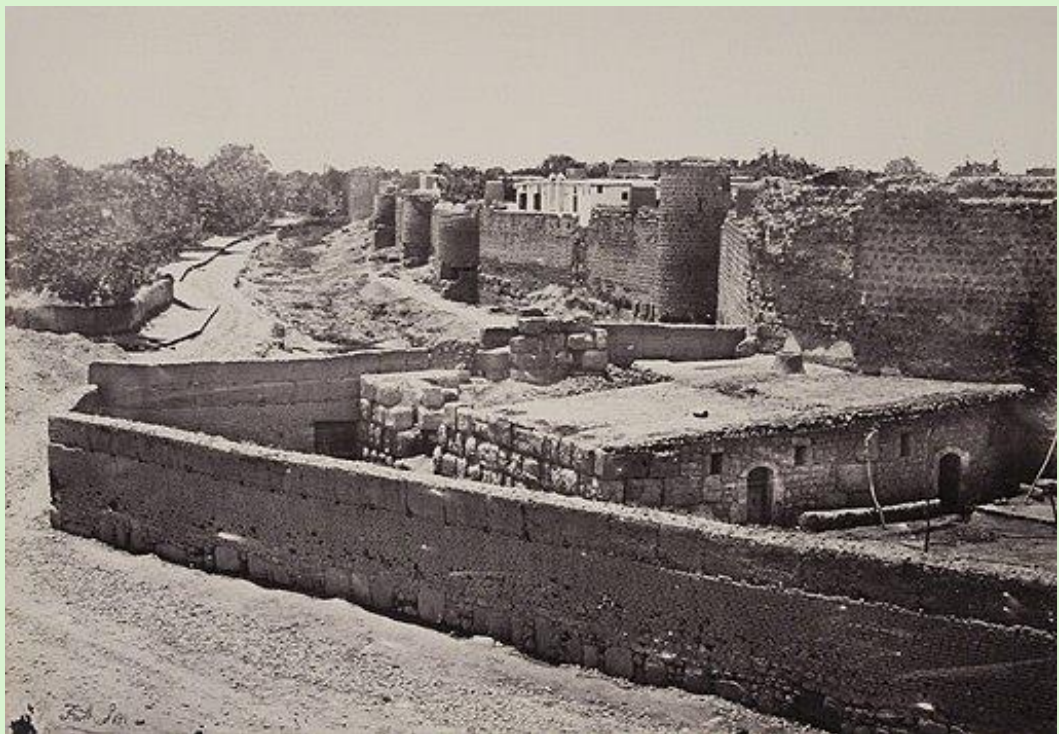
21 節にあるように、「この人は、私たちを迫害しに来た人だよね。信用出来るの?」というわけです。しかし、次第にパウロを信用するようになっていたことが、短く語られています。

「9:22 しかし、サウロはますます力を増し、イエスがキリストであることを証明して、ダマスコに住むユダヤ人たちをうろたえさせた。」

おそらくは、ギリシャ語を話す、外国に住むユダヤ人たちからは、相当、戸惑い(「うろたえさせた・・・」)があったが、彼がイエス様を愛し、イエス様こそ救い主だ、神さまだと説く様子に、次第に、彼を信頼するようになっていったということだと思います。

しかし、クリスチャンでない、ユダヤ人、ユダヤ教のユダヤ人にとっては、あくまで裏切り者ですから、パウロ殺害計画が持ち上がったと言います。

「9:23 かなりの日数がたち、ユダヤ人たちはサウロを殺す相談をしたが、9:24 彼らの陰謀はサウロの知るところとなった。彼らはサウロを殺そうと、昼も夜も町の門を見張っていた。9:25 そこで、彼の弟子たちは夜の間に彼を連れ出し、籠に乗せて町の城壁伝いにつり降ろした。」



すなわち、その殺害計画を知った教会員たちは、パウロを、ダマスコから逃がさないといけなかったと考えたようです(←1857年頃に撮影された写真「St. Paul's Wall, Damascus (ダマスカスにある聖パウロの壁)」)。そして、抜本的な解決は、少なくとも、エルサレムのクリスチャンの教会の使徒達の、この人は、教会の仲間

だよ、あるいは、異邦人伝道の使徒だとの、お墨付きをもらえれば、守れると思って、エルサレムに送り出したのです。まあ、エルサレムから、クリスチャンを捕まえるために遣わされたパウロを、エルサレムに返すというのは、ある意味、危険にも思えますが、そのユダヤ人と戦い、イエス様の証をして、教会への迫害の中でも、しっかりと立ち向かい、エルサレムを離れないで戦っている教会、使徒達、弟子達がいましたから、ライオンの巣に送り出すようにも見えますが、やはり、彼らに守ってもらうのが、これからのパウロの宣教活動を考える上でも最善と考えたのかも知れません。

案の定。「9:26 エルサレムに着いて、サウロは弟子たちの仲間に入ろうと試みたが、みな、彼が弟子であるとは信じず、彼を恐れていた。」教会の人たちからは、信用されなかったようです。しかし、そんな中、一人の弟子が、私がパウロを受け入れ、世話をみましょうと申し出た人がいました。いずれ、パウロと共に、異邦人伝道の二本の柱の一本となるバルナバでした。

「9:27 しかし、バルナバはサウロを引き受けて、使徒たちのところに連れて行き、彼がダマスコへ行く途中で主を見た様子や、主が彼に語られたこと、また彼がダマスコでイエスの名によって大胆に語った様子を彼らに説明した。」

バルナバのおかげで、次第に信用されるようになったパウロ（サウロ）は、まるで、自分に対する疑義を晴らすかのように、積極的にキリストを公に証しし始めました。

「9:28 サウロはエルサレムで使徒たちと自由に行き来し、主の御名によって大胆に語った。」

しかし、ユダヤ人は、サウロ（パウロ）に裏切られたわけですから、自分たちが使わしたパウロが、いわば、敵側に寝返ったと考えたでしょうから、しかも、相手側について、キリストが神であり救い主である事を、学識のあるパウロが論理的にも理路整然と語り、自分たちの間違いを結果的に指摘する者ですから、パウロをなき者に使用と考えたのは当然のことでした。



「9:29 また、ギリシア語を使うユダヤ人たちと語ったり、論じたりしていたが、彼らはパウロを殺そうと狙っていた。9:30 それを知った兄弟たちは、彼をカイサリアに連れて下り、タルソへ送り出した。」

パウロを、カイサリアのおそらく港に送って、船で、彼の生まれ故郷のタルソへ、とりあえず送り出そうと考えて、そうしました。

最初にみてきたように、このように、パウロという宣教師が、遣わされ、その役割を果たすためには、教会の働き、多くの兄弟姉妹の助けがあったからこそだったという、この報告を見落としてはならないと思います。

私たちも、おそらく、この牧師を支えることも、また、とりわけ、この希望の群の三村先生や、中島先生のために祈り、支えることは、ただ単に、教職者を支えるという事以上に、主の働きのその使命に、欠かすことの出来ない役割であることを、理解し、また感謝したいと思うのです。

「9:31 こうして、教会はユダヤ、ガリラヤ、サマリアの全地にわたり築き上げられて平安を得た。主を恐れ、聖霊に励まされて前進し続け、信者の数が増えていった。」

ルカは、「こうして」と言いますが、「こうして」とは、どういうことでしょうか。ルカの思いは、まさに、神の働きは、人を用いて、兄弟姉妹、クリスチャンを用いられてでなければ、前に進まないこと（**「前進し続け」**）を言っているのだと思います。

二つのことに触れておきたいと思います。この話しを前にしたとき、スタンフォード大学を出られて、IHI でジェットエンジンの研究にたずさわれ、京都大学で教えられ、しかし、彼の家に行くと、聖書のギリシャ語の本が並んだヘンク（パウロにならって、テント伝道者：自分で自分の生活を支えながら宣教する者）という兄弟が、この話しを聞いて、私に言われたのは、

先週、礼拝が終わりました後に、ある兄弟が言われたのは、「先生見て下さい。『信者の数がふえて行っただけだ。』とあります。」「そうですね。」「パウロが、ユダヤ、ガラテヤ、サマリアの地から、故郷に帰されたら、信者の数が増えたのですね。面白いですね」と。

パウロにとっては、魂の故郷エルサレムに行くことも、当時のユダヤ教の大学であり、大学を代表するいわば著名な学者ガマリエル教授の下で学んだ者、すなわち故郷の英雄が、故郷に帰っても、その地位を捨てて、クリスチャンを擁護し、キリストを信じているなど、恥さらしだったかもしれませんが、そんな肉の故郷に帰ってこそ、宣教は前進したというのは、たしかに面白いことです。

私たちも宣教師のように、現地に遣わされなくても、故郷にとどまるにしても、そこから、世界宣教の広がりのある事、宣教は、私たちが今、住んでいる、あるいは遣わされている職場、地域の、そこからでしか、広がらないことも理解すべきかも知れません。

さて、今週の歩み。いよいよあつく、精一杯、目立たなくとも、主のために人々の救いのために、役に立つために尽くす歩みでありたいと願うのです。遣わされた

場所にあつて、小さな宣教師として、主の証し人として、その役割を果たしたいと願うのです。